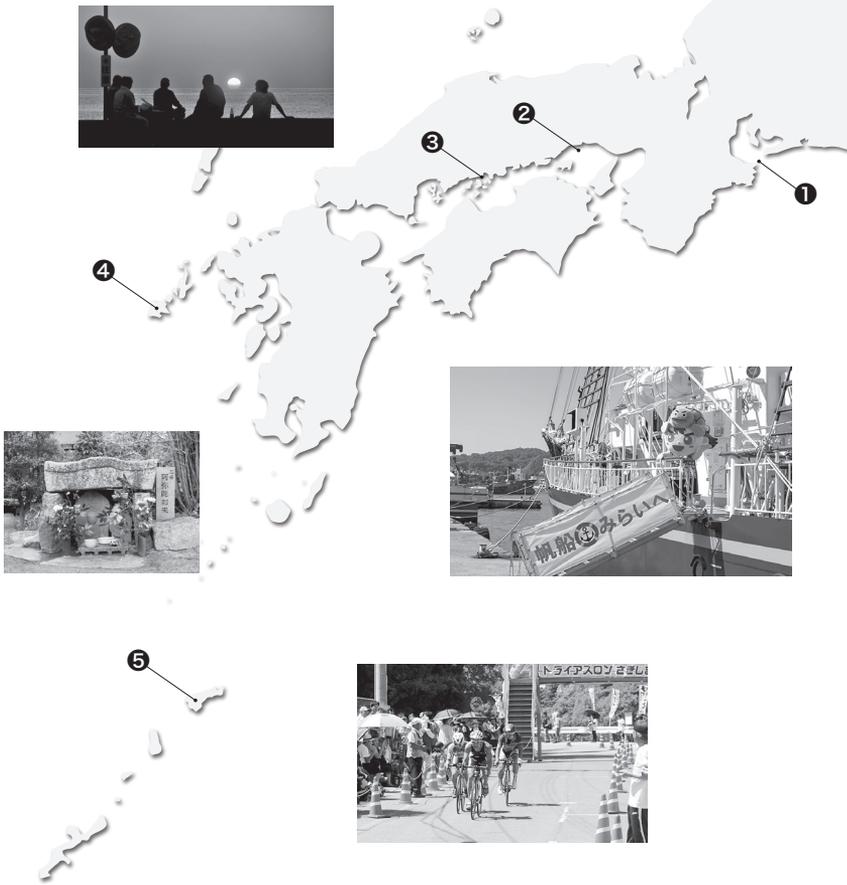


特集 島を元気にする組織・II



前号に引き続き、島を元気にする組織についての特集をお送りする。

戦後の高度経済成長のなかで、レジャーとしての旅行が定着していく。このとき一部の離島は日本に残る「秘境」として旅行者の関心を集め、観光需要が高まった。その後、国鉄によるデイスカパー・ジャパン・キャンペーンなどを受けて国内旅行の人氣に火がつくと、伊豆諸島などは手軽に行ける「海外」として脚光を浴び、多くの観光客が訪れる地となった。その様相は「離島ブーム」と呼ばれ、ピーク時の島の観光客数は年間一七〇〇万人以上(昭和四九・五〇年度)ものぼった。

しかし、交通網の発達による海外旅行の一般化や観光地間競争の激化、ICTの発展にもなう団体から個人への旅行形態の変化や観光ニーズの多様化などにより、《量》や《もの》より《質》や《こと》を重視する人々が増えたことで、本土・島を問わず旅行会社の営業力な

- ①路地、海女小屋、無人島
 ——住民の協力で特別な《島旅》をプロデュース……………22
 島の旅社推進協議会（三重県鳥羽市／答志島）
 鳥羽市地域おこし協力隊 五十嵐ちひろ
- ②民間中心の観光で諸島全体を活性化
 ——海運・採石・漁業に次ぐ第4の産業に……………28
 家島観光事業組合（兵庫県姫路市／家島諸島）
 いえしまコンシェルジュ 中西和也
- ③住民主体で魅力を発掘、「海浜セラピーツアー」などを実施……34
 元気さぎしま協議会（広島県三原市／佐木島）
 三原市地域おこし協力隊 松岡さくら
- ④しま山と世界遺産——勉強熱心な中高年有志が観光ガイド……42
 NPO法人 アクロス五島（長崎県五島市／福江島）
 ライター 竹内 章
- ⑤暮らしと観光を両立、持続可能な集落づくりを……………50
 NPO法人 TAMASU（鹿児島県大和村／奄美大島）
 同法人代表 中村 修



どを主とする従来型の誘客のみでは旅行者の呼び込みが難しくなってきた。

近年、各地域では、その土地ならではの自然環境や伝統文化、暮らしや生業を観光資源として捉え直し、地元提案型のいわゆる「着地型」の旅行商品として提供する「ごきがみらる」。前号で取り上げた地域一丸となって《体験民泊》に取り組む組織は、その一つの実践例といえる。

今号では、地域全体はもちろん各島・各地区単位で、住民の日常生活の一部となっている海浜や山、暮らしそのものを観光商品化し、地域の方々と協力した特別な《体験プログラム》を企画実行する組織にも目を向けた。

国では、観光地経営の視点に立った観光地域づくりを担う法人を登録、その取り組みを後押ししているが、ここに登場する組織は、あたかも「持続可能な島・集落経営」の視点に立った観光地域づくりを実践する「島・集落版DMO (Destination Management Organization)」と呼べるかもしれない。

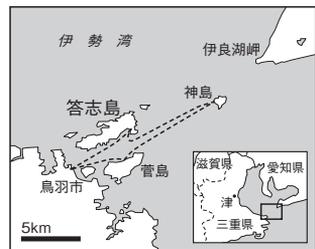
今回は、地元住民などと連携して体験プログラムを提供している三重県答志島、兵庫県家島諸島、広島県佐木島、長崎県福江島、そして鹿児島県奄美大島の事例を紹介する。

島の旅社推進協議会

路地、海女小屋、無人島

——住民の協力で特別な《島旅》をプロデュース

鳥羽市地域おこし協力隊 五十嵐ちひろ



答志島：鳥羽港の北東約1.4kmに位置する。面積6.98km²、周囲26.3km、人口2,074人(平成31年2月末現在)。島の北東部に答志地区、和具地区、南西部に桃取地区がある。漁業従事者が約50%を占め、次いで観光業が盛ん。夏場を中心に海水浴客や釣り客などで賑わう。

島のかあちゃんたちが、島の旅を企画・実践する団体。

それが答志島で活動する島の旅社推進協議会(以下「島の旅社」)だ。同社は、島の魅力を旅行者に伝えるべく、島内の案内や体験プログラムの提供を行なっている。

海に囲まれ、島全体の八割が森林である豊かな自然環境と、島の人たちが長い年月をかけて培ってきた独自の伝統や文化は、それだけで博物館になるんじゃないか——。そんな思いから島の旅社の活動が始まった。二〇〇〇年、愛知県での二一世紀最初の万博開催や中部国際空港開港の五年前のことだ。これらイベントをきっかけに訪れるであろう国内外の観光客に、なんとか鳥羽まで足を運んでもらいたい、と市の職員を中心としたワーキンググループが提案したのが「島の旅社」、つまり離島への旅であった。

鳥羽市といえば、ミキモト真珠島や鳥羽水族館などの大

型観光施設が整備され、海岸に沿って多くの漁村があることから、観光と漁業の町として発展してきた。それらに次ぐ鳥羽ならではの魅力が「離島」であると位置づけ、答志島が最初のフィールドに選ばれた。

地域住民の協力で成り立つプログラムの数々

答志島の人口は約二〇〇〇人。答志・和具・桃取の三つの地区に分かれており、行事や文化、方言なども違う。ただ、どの地区も人口の半分以上が漁師や養殖業、水産品加工業など漁業関係の仕事に従事しており、飲食店や旅館などを営む人たちがいる。

「市内のほかの三つの離島と比べると、答志島は面積が広くて人口が多い。旅館も比較的残っているといった条件が、島の旅社を立ち上げるのに適した土地だったのだろう」と、

語るのは島の旅社事務局長の山本加奈子さんだ。
 加奈子さんの出身は大阪。二十年ほど前に和具地区の漁師さんと結婚して以来、答志島に住んでいる。二〇〇二年から島の旅社の活動に関わる加奈子さんの語る同社の大きな特徴は二つだ。

一つ目は、地域住民との密接な関わり方で、島の旅社のプログラムには地元の人たちの協力が欠かせない。一例をあげると、小学校の団体向けプログラムのひとつに、島内の入り組んだ路地を歩き、クイズに答えながらポイントをまわるスタンラリーがある。参加者へはポイントの場所もクイズの答えも地元住民に聞くように指示しており、地域の方々の協力なくしては成り立たない。具体的には「寝屋^{ねや}子の館」というコミュニティセンターへ行くように指示があり、そこで「寝屋子をするのは男子か、女子か？」というクイズが出される。寝屋



島内を案内する島の旅社事務局長の山本加奈子さん。

子は、今では答志地区のみに残る若衆宿の制度で、一五歳になった男子たちが組をつくり、親代わりの人「寝屋親^{ねやおや}」の家で毎晩寝起きするもので、地域のコミュニティ形成に大きく貢献し、かつては全国各地で見られた。子どもたちからクイズの答えを聞かれれば、島の人は誰でもこのような説明をしてくれる。

地域住民の生活空間である路地がフィールドとなっているが、参加者たちが路地を走ったり、大きな声で話していてもクレームはほとんどない。それどころか「今日は子おら(子どもたち)が歩いとるから、家の前に立つといたらんと(立っておいてあげないと)」と、やる気満々のおばあさんがいたり、「めずらしもん(珍しい物)食わしたるか?」と、湯がいたカメノテをあげるおじさんがいたり、住民も楽しんでるようだ。

観光用の「海女小屋」は、まさに地域の方々の手でつくられたものである。多くの海女さんが活躍する答志島では、本物の海女さんたちが休憩で使う海女小屋がいくつか存在する。住民の皆さんは、島に生えている竹を刈りるところから、金属での骨組みづくり、電気や水の配線や組み立てまで、すべての作業を自分たちの手で行ない、本物の海女小屋のす

くそばに、かつての小屋をイメージした体験用の海女小屋を建てた。島を訪れる観光客や島の発展のために、と多くの方々が協力してくれたそうだ。この海女小屋を利用して、海産物を炭火焼きで食べる体験は好評。現役の海女さんが食材を目の前で焼きながら、海女漁についての話を聞かせている。

地区間の交流と理解から始まった活動

桃取地区の沖にある浮島うきしまという無人島に船で渡り、磯観察を行なうプログラム「浮島自然水族館」は、大潮の干潮時のみ顔を出す岩場をフィールドに、夏季に期日限定で開催している。ヒトデや貝、ウニ、ウミウシ、時にはタコなどを見つけて観察し、終わったら海へ還す。子ども連れに人気のプログラムだが、これも地元の協力が欠かせない。浮島は桃取の漁師たち（潜水漁含む）の漁場である。生き物を持ち帰らないことやひっくり返した岩を元に戻すなどのルールを決めることで、漁協から場所の使用許可をもらっている。また、開催日には渡船の許可を持つ何人かの船長さんをお願いし、船を出してもらう。年内最初の開催日の前には桃取地区の八幡神社の宮司さんや総代さんをお願いし、安全祈願祭も執り行なうなど、地域住民と連携している。今でこそ「島の旅社がやっていることなら安心」「島の旅社には協力する」という声を耳にすることが多くなったが、最初から皆が協力的だったわけではない。島の旅社の



子ども連れに人気の体験プログラム「浮島自然水族館」。

本格的な活動は二〇〇三年に始まったが、「当時は、三つの地区間の交流は希薄だった」と加奈子さんは振り返る。「地理的に離れている桃取はさることながら、私の住んでいる和具のすぐ隣の答志地区でさえ、集落に入って観光案内をするのに気が引けた。隣の地区のことだって、昔から

いから一人でやって！ という日もあるが、基本的には家業が優先」といったように、時間的な制約もある。

これまで島の旅社は、常駐スタッフを雇ったことはない。しかし、それぞれが可能な範囲で参加するという方針が、活動を継続できている秘訣ともいえるだろう。

スタッフの増強と収入の安定が課題

一方、常駐者がいない現在のやり方では、どうしても取りこぼしてしまうお客さんが存在する。このほか、たくさん働いた月とあまり出られなかった月で収入に大きな差がつくことも課題である。本来ならアルバイトやパートとして安定した収入が得られることが理想だろう。

現在の主要なスタッフは四人。これに海女小屋体験に協力してくれる海女さんや、団体の受け入れの際に臨時的に働いてくれる数名がコンスタントな関わりを持つ人たちである。今後は島の中を案内したり、プログラムのコーディネートや企画ができるスタッフを増やせればと考えている。皆が副業としてやっている限り、一人でも多くのスタッフが必要で、加奈子さんは「移住者の女性に声をかけたり、これまで協力関係になかった人にも協力をお願いしている。なんとか裾野を広げているところだ」と話す。

収入の安定に向けては、集客努力と体験プログラム以外での収益確保に努めている。新たな企画として行なったのが、魚さばき体験だ。若いスタッフ二名が中心となって島



島の旅社のスタッフ。左から山下実香さん、濱口浩代さん、川原紗知恵さん。

外から参加者を募り、昨年一二月、島の女性が講師となり魚のさばき方を教え、郷土料理などをつくって食べる初のイベントを開いた。準備期間は短かったが、四人の参加者のアンケート結果は上々だった。「どれだけ既存のプログラムが良くても、新しいことに取り組んでいかなければ、お客様は減っていく」と、加奈子さん。「まずは、どんなもんかやってみよか」と若いスタッフたちの背中を押す。

その二名のスタッフが最近始めたのが、シーグラスを使ったアクセサリーづくりだ。島の海岸には、波にもまれて角が丸くなったガラスがたくさん落ちていて、シーグラスやビーチグラスと呼ばれている。趣味でアクセサリーづく



島の旅社で販売しているシーグラスアクセサリ。

りをしていての方に教えてもらいながら道具や材料をそろえたところ、体験プログラムもできるし、スタッフが制作した物を販売することもできる状態になった。体験プログラムと違って、一度できあがった商品の販売は、販路さえあれば人手の必要はない。これまでは島のイベントや、海女小屋体験をしたお客さんを対象に販売している程度だったが、旅館からの引き合いもあり、今後はこれら商品の販売にも力を入れていこうと考えている。

じつは、この二人のスタッフも島外から嫁いで来た女性だ。「うちは家族の理解があるから、島の旅社で働くことができているけど、やっぱり家の仕事もあるから、バイトしづらい人は多いと思う」と話す。彼女たちに共通するの

は、どこに住んでいようと面白いことがしたい、という好奇心の強さ。これが島の旅社の新しい風になり、これまでにないアイデアの企画・実践につながっている。

● 筆者は、地域おこし協力隊として二〇一七年に答志島に移住した。そのため、島の旅社の活動当初の苦労を目の当たりにしていないが、地域住民と協力してプログラムをつくり上げていこうという一貫した姿勢や、行政のサポートがあったからこそ現在につながっていることは想像に難くない。最近では旅館組合のイベントを島の旅社のスタッフが手伝うこともある。また、旅館の宿泊客を対象としたプログラムの開発も依頼されている。

島の旅社は、プロジェクトの立ち上げから今年で一九九年を迎えた。これまで積み上げてきた経験と地域住民との信頼関係を糧に、これからも地に足の着いた豊かな島の旅のプロデュースを続けていく。



五十嵐ちひろ (いがらしちひろ)
1988年生まれ、埼玉県出身。2017年4月に答志島に移住。鳥羽市地域おこし協力隊として、島の文化や行事の情報発信をブログやSNSなどで行っている。また中学生向けの英語塾やグループによるアート展なども開催している。